

# 2023年10月20日 第3448回例会

於： 横須賀商工会議所



<点鐘・開会> 12:30 藤村 会長

<唱 和> 「それでこそロータリー」

<ゲスト紹介> \*東京大学史料編纂所 教授 本郷 和人 様

\*青少年交換留学生 Chia-Yuan WEN(Sam) 君

<交換留学生挨拶> \*青少年交換留学生 Chia-Yuan WEN(Sam) 君

<会長報告> \*第4回理事役員会 報告

- ・年忘れ家族会予算案承認について
- ・奉仕の基金選考結果について
- ・次年度地区財団奨学生推薦について
- ・次年度青少年交換留学生推薦について
- ・ローターアクト地区大会について
- ・インボイス制度について

\*第4回第1グループ三役会 報告

- ・ポリオデー「夢の音楽祭」について
- ・クラブ中期ビジョンの策定に関するヒアリングについて
- ・第1グループ合同例会について

\*ガバナー事務所から

- ・青少年交換 来日学生オリエンテーションのお知らせについて  
11月4日(土) 15:00～

会場：藤沢商工会議所ミナパーク 5F503会議室

- ・地区大会ご提出書類等についてのごお願い

<委員長報告> \*ローターアクト委員会 臼井委員長から

- ・ピザ例会開催 報告
- ・10月22日開催のフリーマーケット例会について

<幹事報告> \*例会終了後VTT特別委員会 開催

<出席報告> \*出席委員会 小平会員から10月20日の出席報告

会員数	出席対象者数	出席数(ZOOM出席数)	欠席数	メイクアップ数	出席率
119名	110名	80名(3名)	30名	4名	75.68%

メイクアップ：岡田(英)会員 横須賀北RC出席

小沢、北村、小山(陽) 各会員 地区委員会出席

<ニコニコ報告>

- ・三 役 東京大学史料編纂所 教授 本郷和人様、本日楽しみにしておりました。よろしくお願いいたします。
- ・永井、濱田、児玉、田中、比護、長島、福西、浅葉、前川、中村備、小平、杉浦、勝間、波島、前田、植田、南、江口、小佐野、谷、松本朋、二瓶、田邊、久保田、鈴木豊、齋藤隆、新倉健、根岸、澤田 各会員  
東京大学史料編纂所 教授 本郷和人様、本日の卓話を大変楽しみにしておりました。どうぞよろしくお願いいたします。
- ・三 役 青少年交換留学生 Chia-Yuan WEN君、楽しく過ごしてください。
- ・石田、大野健、小保内、荻山、椿、八巻、長尾、前川、佐久間、権田、植田、柴田、寺田、野坂、上林、徳永、勝見、田村、鈴木(鞠)、Enora、小山(鞠) 各会員  
青少年交換留学生 Chia-Yuan WEN君、ようこそいらっしゃいました。例会をお楽しみ

ください。

- ・岡田 崑、荻 山、久保田 各会員 誕生月祝いとして
- ・南、山 田、物 井 各会員 入会月祝いとして
- ・臼井ローターアクト委員長 10月15日、ローターアクトクラブにピザ例会を齋藤眞且会員のご自宅で開催させて頂きました。齋藤眞且会員、ご準備から1日有難うございました。
- ・加藤 勲、大 石、竹 株、岡田 崑、渡 辺、渡 邊、笠 木、久保田、兼 城、角 井 各会員  
箱根駅伝予選会は100回記念大会により、関東以外の大学も参加し、本選出場校も例年より3校多い13校が選ばれました。10年ぶりの出場となる東京農業大学をはじめとして、本選出場を決めた大学の皆さんおめでとうございます！

## <卓 話>

## 「中世日本、その他もろもろ」

東京大学史料編纂所

教授 本郷和人様

ご紹介に預かりました本郷です。よろしくお願ひします。歴史をきちんと伝えることは本当に難しいことです。僕は死ぬまでに「日本中世史」という本を書きたいと思っています。

日本中世史には6つの原則・法則があることが分かってきました。1番目ですが、日本は1つではないということ。2番目は日本史も1つではないということ。3番目は日本史とは基本的にぬるく、大きな変化は外圧でしかもたらされず、外圧がないと日本は変わらないということ。外圧の代表的な例は、幕末に来航して開国を迫ったペリーでしょう。4番目は日本史というのは官職より人、血より家であり、血の家族より家の家族の方が大切ということ。5番目は日本史の神仏で、「信じるものは救われない」というのが、日本の神仏の在り方です。6番目は自由、平等、平和で、これは日本的な自由と平等と平和ということになります。

今日は、日本は1つではないということをお話ししたいと思います。僕たちは小学校の頃から日本というのは1つの言語を使う1つの民族が1つの国家を築いているのだと、それは古代からずっとそうなのだと学んできているわけですが、本当にそうなのかという疑問が生まれます。日本が1つの国家であるということは、自明のことなのでしょうか。実はそうではないと思っています。

統一されるということは、権力者の強力な影響下に入ることになりません。すると何が起きるかということ、権力者に対して税を払うという義務が生じます。これに対して税を受け取った権力者は、納税者に対してサービスを提供します。そのサービスに浴した者がその対価として税を払うわけです。これが一番基本的な姿だと思います。そういう意味で、ちゃんと税を払い始めるのはいつからかということ、豊臣秀吉が1590（天正18）年に日本を統一してからだと思います。日本が統一されたのは、この時だと思っています。全国支配を進める秀吉はその総仕上げとして奥羽の地を平定すべく、東北諸大名に対する処分・配置換えや諸政策を示す奥羽仕置を行いました。東北は為政者にとってはまだまだ未開の地だったのです。徳川家康の時代になり初めて東北にまで為政者の視野が広がるのです。政権を受け継いだ家康が東北地方を日本の仲間として受け入れ、全国共通で米で税を払うことを始めたのです。西国では当時銭で税を払うことは普通でした。銭で税を払うのと、米で税を払うことは、今でいえば現金決済とカード決済ぐらい違うわけです。経済原理からいえば米で払うより銭で払う方が進んでいるわけです。西国で行っていることを遅らせても、東北に合わせたのです。東北ではなぜ銭で払わないかということ、銭がないからです。江戸時代に西国の藩と仙台藩や伊達藩を比べると銭の価値が8倍も違っていました。8倍も東北の方が高いということです。

小学生に話をするのは本当に難しいので、まず1万円札見せて「これいくらだ」とやるのです。するとみんな「1万円」と言うじゃないですか。実は1万円札の製造費用は30円です。つまり30円の紙切れにすぎません。30円のものが1万円になることは、日本という国の信用によるもので、信用は本当に大事なのだというような「つかみ」から話を進めていくのです。

ここで、大きな問題が出てきます。日本の1番古い銭は何でしょうか。言ってみてください。そうです。和同開珎です。しかし、これが大間違いなのです。なぜなら、和同開珎は広く流通せず都の周辺でしか使われなかったのです。使われない銭が、果たして銭なのかという話になるわけです。では、貨幣経済が日本に

浸透したのはいつかという、和同開珎ができた時から、和同開珎が使われた時からと思ったら日本史は分からなくなるのです。

これと同じで、源氏物語が日本を代表する傑作文学ということは正しいと思います。ただ、平安時代を代表する文学とはいえないのです。平安時代の人々は、わずかの人が源氏物語を読んでいません。しかも紫式部は当時の圧倒的多数の庶民の生活と何の接点も持っていません。その意味でいうと、紫式部の肌感覚で源氏物語を書いたとしても、その肌感覚に平安時代の農民や職人、商人たちの感覚はないのです。しかも、貴族ですら教養として源氏物語を読むようになるのは室町時代からなのです。だから、その意味でやはり教科書的に当たり前のようにいわれている感覚、つまり源氏物語は平安時代を代表する文学、枕草子は平安時代を代表する素晴らしいエッセイということには疑問を感じます。

枕草子に「にげなきもの」という段があります。「にげなきもの」を現代語訳すると「ふさわしくないもの」とか「似合わないもの」という意味になります。「にげなきもの。下衆(げす)の家に雪の降りたる。また、月のさし入りたるもくちをし」を現代語訳すると「似合わないもの。身分の低い者の家に雪が降った様子。そんな家に、月明かりが差し込んでいるのも残念」となり、これが清少納言の感覚です。このようなことを今の世の中で言ったら大変なことになります。それを言ったのが政治家だとしたら、次の選挙では間違いなく落選です。清少納言が悪いわけではなく、彼女にとっては常識なのです。その常識とは一体何なのかということを考えてとき、日本語は1つだと思えなくなります。日本語というものは、結局、古代からの積み重ねなのです。つまり「かくあるべし」「こうあってほしい」といったものが教科書に書いてあるのです。

考えてみてください。律令というものを書いてある通りだとすると、民衆は6歳になると土地を分け与えられ、そこを耕し、それで租庸調という税を払います。租は米による納税です。庸と調は労役の代わりに布を納めたり、繊維製品や特産品などで税を払うことですが、戸籍もしっかりしていないのですから、守られるわけがありません。これはあくまで努力目標であって、「実際に奈良時代にそのようなことが起きたとはとても思えない」ということで、奈良時代や平安時代はこのようなことのオンパレードの時代だったのです。書いてあることを、そのまま流通させようと思っている学者が多いのです。だから、本当はどうなのかということを考えなければならないのです。

平安時代という時代は1つの原則があって、外からの関係性というか、外からいろいろな働きかけがないと、日本人はすぐぬるま湯に漬かるのです。平安時代の初めは唐が攻めてくるかもしれないという危機感がありました。平安時代が進み、どこも攻めてこないとなると気が緩むのです。江戸時代と平安時代はすごく似ています。

やはり、書いてあることや史料に基づいて考えなければならないということは大原則なのですが、史料がどこまで信用できるか分からないというのが古代史なのです。そういうことを考えると、日本史というものは、相当書き換えないといけないのだなということまで話を終わります。どうもありがとうございました。



<閉会・点鐘> 13:30 藤村 会長

週報担当 柴田 朋彦